

国際会議参加報告

第 50 回 国際軍事史学会大会の概要

進藤 裕之

国際軍事史学会（ICMH）の第 50 回大会が、8 月 31 日から 9 月 5 日までの間、セネガル共和国ダカール市にある Hotel Azalai Dakar を会場に開催された。共通テーマは「反乱と主権」であった。参加国は、ヨーロッパとアフリカを中心に約 30 カ国におよび、大会参加者約 150 名の内、50 名以上が報告を行った。大会の運営は、セネガル軍の全面的支援の下に行われた。

31 日に黒人文明博物館およびアフリカルネッサンス記念碑における研修に続いてセネガル国防大臣主催の歓迎レセプションが行われ、大会は始まった。研究会は 9 月 1 日から実施され、14 のセッションに分けて進められた。各セッションにおいて 3～4 名が各々 20 分の発表を行った。発表は英語、フランス語のいずれかで行われ、英語の発表はフランス語に、フランス語の発表は英語にそれぞれ同時通訳された。

日本からの発表者は、1 日に出張者（進藤）が「厚木航空隊事件」について発表し、4 日に立命館大学・宮脇昇教授が日露戦争における鉄道輸送について発表し、いずれも好評を得た。

大会期間中に行われた個々の発表は学術的水準が高いものがほとんどであった。植民地支配に対する反乱の具体例を取り上げた発表の他、複数の反乱を対象とした比較研究、事象としての反乱の類型化とそれぞれの特徴を分析した発表も行われた。開催地がセネガルであったことから、アフリカにおける植民地支配と反乱の諸問題に関する発表が多かった。

表敬行事と各種研修もほぼ毎日行われ、憲兵隊司令部、セネガル軍史料・歴史遺産局、国軍博物館、平和維持活動博物館、国軍設立 50 周年博物館等を訪問した。4 日には奴隷貿易の拠点の 1 つであり、世界遺産に登録されているゴレ島に渡り、同島歴史博物館を研修した。その前日（3 日）にバンディア自然保護区を見学し、西アフリカに生息する動植物を自然状態で観察できた。最終日の 5 日は総会が開催された後、陸海空各軍の参謀総長が協同で主催した夕食会が行われ、大会は終了した。

第 51 回大会は、「境界線（国境等）：統合と協調 対 分離と紛争」を共通テーマとして 2026 年 8 月、ブラジル連邦共和国のフォス・ド・イグアス市で開催される予定である。

例年同様、今回の学会において軍事史に関する様々な研究発表を聞くことができた他、各国の研究者と意見交換もでき、世界各地の研究動向と関心事項を把握することもできたので、防衛研究所による情報発信と国際交流の促進に役立った。また、各国の研究者とのネットワーク作りの場としての意義も大きかったと思われる。

(防衛研究所戦史研究センター戦史研究室主任研究官)

“A Divine Nation Does Not Surrender!”: The Atsugi Rebellion, August 16-23, 1945

進藤 裕之

要約

1945年8月15日に玉音放送により日本政府が降伏を決定したことが発表され、陸軍と海軍は全体としてその事実を受け入れたが、一部の部隊は抵抗した。中でも第302海軍航空隊（302空）による厚木航空隊事件は最大級の反乱事件となった。

302空は1944年3月に新設され、厚木飛行場を根拠地に関東の防空に従事していた。開隊以来の司令官であり、歴戦の指揮官であり隊員の信望も厚かった小園安名大佐は8月11日、天皇がポツダム宣言を受け入れる意向であるという情報を得ると、降伏が天皇の本心でないと確信し、徹底抗戦を決意した。15日の玉音放送を受けて、小園は「皇国に降伏はない」として、302空の海軍からの独立と抗戦継続を隊員に宣言した。16日から全国各地に伝単を空中散布するなどの方法により、他の陸海軍部隊にも蹶起を呼びかけたが、同意する部隊はなかった。

降伏に向けたアメリカとの交渉への悪影響を懸念した海軍は説得による鎮静化を試みた。ところが、17日ごろから小園は南方で罹患したマラリアによる熱が再発し、行動不能に陥り、21日に強制的に海軍病院に入院させられ、反乱は原動力を失った。海軍大佐であった高松宮宜仁王の説得も功を奏して、302空副長・菅原英雄中佐は反乱の収束を決意し、21日、小園大佐が移送された直後に302空の武装解除を命じた。それでも抵抗を続ける意志を有した隊員約80名は、武装解除される直前の戦闘機30数機に分乗して、無断で陸軍の狭山および児玉の飛行場に脱出したが、やがて説得その他の方法により恭順させられ、反乱事件は収束した。

厚木航空隊事件が発生した背景に、小園大佐と隊員との強力な信

頼関係と絆があり、軍の組織としての統制力や軍紀がそれを抑えられなかったことがある。また、小園大佐と海軍上層部が相互に不信感を抱いていたことが、事前に反乱事件を防ぐことを困難にした。さらに、終戦（停戦）当日まで激しい闘志を燃やして戦っていた部隊に降伏決定を徹底することの難しさも、反乱の原因として指摘されている。